

## 卒業論文の要旨

論文題目	ダンテ『神曲』『帝政論』に見る皇帝・教皇・コムーネ —中世フィレンツェの支配権を巡って
氏名	橋本拓信
メジャー	哲学
<p>文学史にその名を刻むダンテ・アリギエーリの著作には、彼の思想と哲学が大いに反映されている。特に当時のイタリア、フィレンツェを取り巻く政治的闘争を背景とするダンテの権力観は、その思想の中でも特に根幹を成すものであると考えられる。</p> <p>中世イタリアにおいては、神聖ローマ皇帝と教皇がその支配権を巡って対立関係にあった。ダンテの故郷、コムーネと呼ばれる自治都市のひとつであるフィレンツェもこの対立に巻き込まれ、自治権を守るため難しい選択を迫られていた。彼自身そのフィレンツェ政治の要職にあり、政治的闘争の渦中であつた人物といっても過言ではない。様々な争いと思惑を目の当たりにしたダンテは、その作品に何を記したのか。本論考では『帝政論』『神曲』という代表的著作の検証により、混乱のイタリアという背景の中でダンテが望んだ支配と権力について考察した。</p> <p>ダンテは『帝政論』第 1 巻において、アリストテレス『政治学』等を論拠として君主制の必要性を示し、第 2 巻では君主権の正当性を、古代ローマから連綿と続く帝国の歴史—『アエネイス』や『パルサリア』を用いて論証した。第 3 巻においては、教皇が主張する世俗支配権に対して、聖書の解釈やアリストテレスから反駁し、君主権は教皇権の下にあるものではなくお互いが自らの領分—皇帝は世俗を、教皇は精神界を支配するものだと主張した。この『帝政論』を以てダンテは論理的かつ演繹的に世俗支配を目論む教皇を批判し、皇帝支配の正当性を提示した。</p> <p>一方『神曲』では、ダンテ自身に冥府を遍歴させ当時のヨーロッパ、フィレンツェと帝国に蔓延つていた罪について明らかにさせるが、ここにも教皇及びそれに追従する者達への批判的な主張を見出すことができる。中でも地獄篇第 17 歌の教皇庁と結びついたフィレンツェの銀行家及び同第 19 歌の聖職売買に対する批判、さらに煉獄篇第 16 歌における教皇に対する批判と、教皇権・皇帝権の 2 つの権力の分離の主張には、先の『帝政論』との明白な一致、ダンテの一貫した思想が示されている。</p> <p>フィレンツェの政治的抗争の渦中であつたダンテは、『神曲』の執筆目的を人類の救済とし、『帝政論』において正当な統治と普遍的平和を希求している。この 2 つの著作の検証によって、ダンテがイタリア及びフィレンツェの政治的混乱と抗争を、本来世俗を支配するべきではない教皇がその支配を狙い引き起こした分裂に起因すると考えていたことが結論付けられる。そし彼は、教権と世俗権の分離—すなわち皇帝による世俗支配こそ平和と救済のために必要であると説いたのだ。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>この論文は、『神曲』『帝政論』に見るダンテの思想を、その歴史的背景の検証とともに追究する試みである。彼の生きたフィレンツェの情勢を中世ヨーロッパの歴史的枠組みの中に解明し、何よりも『神曲』のみならず晦渋な『帝政論』を翻訳ながら自ら丹念に読み解き、二つの文書に共通する支配権を軸とするダンテの思想を見出し考察した真摯な研究姿勢とその成果は高く評価に値する。</p>	

